

令和 2 年 6 月 19 日現在

機関番号：23503

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2016～2019

課題番号：16K13202

研究課題名（和文）王政復古期プリントカルチャーが反映する非国教徒の声

研究課題名（英文）Nonconformist Print Culture in Restoration England

研究代表者

高野 美千代（Takano, Michiyo）

山梨県立大学・国際政策学部・准教授

研究者番号：10289811

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,500,000円

研究成果の概要（和文）：王政復古後の英文学史では存在さえも見過ごされてきた非国教徒作家のうち、たとえばロバート・ワイルドやベンジャミン・キーチは多くの作品を書き、膨大な数の出版物を世に出し、一般市民に受け入れられていた。そして、非国教徒のメッセージは、彼らの印刷物・作品に凝縮されて見て取ることができる。17世紀後半に、印刷物によって非国教徒が築き上げた文化は、再評価されるべきである。本研究課題では、18世紀以降ほとんど注目されることのなかった非国教徒作家作品を主な研究対象にして、彼らが時代の思潮を反映し、文化の形成の一端を担ったことを証明するために、海外研究者の協力を得ながら王政復古期プリントカルチャーを考察した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本課題は、国内の英文学研究において研究が不足する17世紀非国教徒文学を主に扱うものである。複雑な時代の歴史的宗教的要素を色濃く反映するため、研究を深めるのが極めて困難であったが、この分野の研究をリードする英国の研究者から理解と協力を得てプロジェクトを展開することができた。16世紀の宗教改革から17世紀の清教徒革命に至る英国プロテスタント思想をたどり、王政復古期に弾圧の憂き目に遭った非国教徒による王政復古期プリントカルチャーについて考察の対象とした。英国での研究交流および日本国内での研究集会、講演会開催を実現し、これから先も継続して協働するための国際的研究ネットワークを構築することができた。

研究成果の概要（英文）：Robert Wild (1615/16-1679) and Benjamin Keach (1640-1704) were among the seventeenth-century nonconformist writers who have been mostly ignored since early eighteenth century, although they won a great popularity in Restoration England. This project aims to examine the writings by minor nonconformist writers including Wild and Keach, and the background of their publications as well as their readership. Inquiries into the use of print by nonconformist writers whose works were much read by his contemporaries clearly indicate what the authors wanted to convey to their readers. This project has been proceeded with the aids of overseas researchers who specialise in seventeenth-century English nonconformist literature.

研究分野：英文学、英文化

キーワード：非国教徒文学 ロバート・ワイルド ベンジャミン・キーチ 王政復古期文学

1. 研究開始当初の背景

私はこれまで17世紀英文学に関して歴史的コンテクストを最重視した研究をしてきたが、その過程で王政復古期非国教徒詩人口バート・ワイルドの考察を始めた。現在では無名と言ってよいのだが、ワイルドは1660年の王政復古の際に出版した作品をきっかけにロンドンで一般大衆に爆発的な人気を博した詩人である。彼の主要な作品はブロードサイドなどの廉価の印刷物として流通し、人口に膾炙した。このことは1663年8月23日のサミュエル・ピープスの日記にも書かれている通りである。しかしワイルドの作品が大衆を惹きつけた期間は短いものであり、王政復古期には絶大な人気を誇ったにもかかわらず、18世紀以降彼に関する考察はほとんど行われていない。私自身はこれまでにワイルドに関する論文を数点発表した。日本国内で彼の研究を行う者は他にいない。一方、英国においては2012年に非国教徒詩を扱うアンソロジー (*English Nonconformist Poetry, 1660-1700*, ed. George Southcombe) が発刊された。編者のオックスフォード大学歴史学部ジョージ・サウスコム博士は、ワイルドを含む非国教徒詩人の著作から重要な作品を選び、詳細な注釈を付した。このアンソロジーによって、ようやく王政復古期非国教徒文学に関心が向けられる可能性が世界的に広まったのであるが、体系的な研究は未だなされておらず、今後確立された成果の発表が待たれている。このような状況をふまえて、本研究を遂行することにより、非国教徒文学の歴史的意義・文学的価値を検証し、英文学および英文化史上の然るべき位置づけを是非とも試みたいと考えようになった。

2. 研究の目的

本研究課題においては、これまで看過されてきた王政復古期非国教徒文学を研究対象とし、17世紀後半のプリントカルチャーにおける非国教徒文学を考究することを目的とした。とくに1660年代から1700年頃までに、膨大な数の印刷物を世に出し、多くの市民の支持を受けていた小作家群が存在したという事実を光を当て、未だ研究が十分になされていない非国教徒文学の正当な評価を行うことを研究の中核とした。1662年の礼拝統一法で国教に従わなかった長老派やバプテストなど、様々な信仰や主張を持つこれらの作家たちは、出版することによって思想的・宗教的な問いかけを社会に向けて発信した。18世紀以降、長い間忘れ去られてしまった非国教徒作家の声を拾い上げ、それが当時多くの人々の営みの中に息づいていたという事実を複数の観点から検証する。そして、非国教徒作家による出版物が、17世紀英国社会・宗教・文学についての正確な理解に不可欠な要素であることを証明する。

3. 研究の方法

王政復古期非国教徒文学の緻密な分析作業を行う。まずは、研究対象とする作家・作品を網羅するように、入手が困難である資料を調査収集することに取り組む。第一には中心的な作家2名(ワイルドとキーチ)に焦点を絞り、その後は個別の著者の宗教的スタンスを優先して分類し、順に考察を進める。個別の作家作品の考察は、時代の社会的文脈において読み込むものとする。不足する資料収集と作家作品の分析を進めることに主眼を置きつつも、研究期間を通して、研究成果発表を念頭に置いて、論文の形に成果をまとめる作業を行う。王政復古期非国教徒文学を専門とする海外研究者との研究ネットワークを構築し、現地での共同研究を行うほか、研究者を招聘して国際研究集会を開催し、広くその成果を公表する。

4. 研究成果

2016年度は王政復古期非国教徒文学の主要作家口バート・ワイルドとベンジャミン・キーチの作品の精読・分析を主に行った。口バート・ワイルドに関してはすでにある程度の研究を進めているため、詩集 *Iter boreale* の考察を書物史の観点からアプローチして進め、作品の理解・受容・背景の検討を行った。具体的には、個々の異本の確認作業を進めるなどして、出版の背景となる事項を分析した。さらに、当時ワイルドに次ぐ注目を浴びたと考えられる非国教徒作家のベンジャミン・キーチによる作品を対象として精読・分析を試みた。ワイルドとキーチは出版物の数から言っても非国教徒文学を代表する著者であるため、この2名による作品は本研究の核となるものであり、初年度に十分な考察を済ませ、次年度からの研究の土台を固めるべきであると考えた。キーチは1670年に初めて作品を発表してから1704年に亡くなるまで、30年以上執筆活動を続けた。生涯の出版物は100種以上に及び、出版物の形状は一枚刷りのブロードサイドから手のひらサイズのドゥオデシモまで多様であった。中には人気を博し、何度も版を重ねた著作もあった。考察を進めるうちに、キーチの作品は一次資料のみで膨大な量があり、さらに多くの時間をかけて精読作業に向かわなければ、論考をまとめて発表する段階には到達しないことが判明した。資料の確認・収集等をあわせて、キーチの作品の読み込みを継続することとした。英国では文献資料調査を実施し、現地研究協力者と面会して今後の研究の計画を検討した。

2017年度は、主に非国教徒作家ベンジャミン・キーチの作品研究を進めた。キーチは、バプテスト作家として英米のバプテスト教徒の間では現在も知られているが、日本国内ではほぼ無名で、文学における研究対象とされてこなかった。したがって、文献資料収集から作品精読までを時間をかけて行い、そのうえで成果を研究論文にまとめて発表した。非常に多作な作家であるので、継続して作品群にアプローチする必要がある。文献資料の確認・収集を進めたが、キーチの作品には想定した以上に難解な表現が多数あり、個々の作品に複雑な歴史的思想的背景があるために、読み込むために相当な時間を費やすこととなった。本課題においては、日本国内では十分に考察がなされていない作家群・作品群を研究対象としているため、国際的な研究ネットワークによって研究を確実に進展させたいと考え、非国教徒文学研究の第一人者であるオックスフォード大学のジョージ・サウスコム氏とはメールで連絡を取りながら意見交換・研究交流を続けた。さらに、王政復古期非国教徒研究の世界的権威である英国スターリング大学のニール・キーブル名誉教授を今後招聘して研究集会を開くための準備を開始した。

2018年度は、非国教徒作家ベンジャミン・キーチの作品分析を継続して進めることを中心としながらも、ヴァヴァサー・パウエルなどその他の非国教徒作家作品の考察も開始した。キーチは、まだ日本国内では十分に研究されているとは言えない。したがって、国内で認知されるために論考を発表することが不可欠であると考え、これを目標として資料精読を重ね、その成果の一部を論文にまとめて発表した。とは言え、このとき発表した論文は、キーチの想像的作品に焦点を絞ったものであり、彼の全体像をとらえるにはまだまだ時間を要することが考えられる。一方で、海外研究協力者とのやり取りを通して、キーチと同じバプテストのジョン・バニヤンによる著作との関係において研究を進めることが非常に意義深いということが判明した。キーチとは異なり、バニヤンは現在でも世界的に認知されている有名な作家であるが、17世紀の英国において、バニヤンとキーチは同等の宗教作家であり、相互に影響を及ぼしていたと考えられる。寓意物語に関しても、教育的作品においても、類似した部分が顕著であることを認識するに至った。さらに、キーチが若者向けの作品においてエンブレムブックから借用した部分があると考えられることや、バニヤン以外にも影響を受けたその他の作家(ジョージ・ハーバート、ジョン・ドライデンなど)の存在があったことなどを知ることもあった。その他の非国教徒小作家作品に関する考察にも着手したが、むしろキーチとジョン・バニヤンとの関連を追及することを優先した。海外研究協力者との共同研究によって、当初想定しなかった発見が多くあり、研究が大いに発展した。

2019年度の主要な成果は、本研究課題における主な目標のひとつが達成できたことである。本課題では、日本国内では十分に考察がなされていない作家群・作品群を研究対象としているため、国際的な研究ネットワークが重要と考えてきた。そこで、海外研究協力者である英国スターリング大学ニール・キーブル名誉教授、オックスフォード大学ジョージ・サウスコム博士を招聘し、2度にわたって国際研究集会を開催した。非国教徒リチャード・バクスター研究の世界的権威であるキーブル氏からは、17世紀後半の英国において、非国教徒作家たちが政治的宗教的メッセージを同時代の民衆に伝達するためにプリント(印刷物)が不可欠であったという本研究の命題に沿って講演をしていただいた。(演題:キーブル "Puritanism and Print in 17C England"、高野"John Bunyan's *The Pilgrim's Progress* in Japan") サウスコム氏を招いて行った科研費研究成果公開事業となる研究会においては、17世紀英国のプリントカルチャーについての研究発表(演題:サウスコム"Protestantism and Print in 17C England"、高野「非国教徒のプリントカルチャー」)を行った。これら研究集会には、国内の研究者はもちろん、学生や一般の文学・歴史愛好者など多様な聴衆を迎えることができ、本課題による近世英国研究の成果を、広く社会に発信することとなった。本研究課題を遂行する中で構築した国際的な研究ネットワークは、将来的にも機能して17世紀非国教徒文化研究の発展につながるものと考えている。

以上のように2016年度より研究を展開したが、個別作品の精読と考察、国際的な共同研究を行い、多くの収穫を得ることができた。非国教徒作家による出版が、聖書の解説等による神学や教義の理解の浸透を目的とする以外に、政治的な効果をもくろんだものや、幼い子供や若者の教育を意図したものであったと具体的に認識した。とくに教育に関する出版物はピューリタンの志向を反映するものであり、それと同時に、ルネサンスの流れを汲むものであるとの見方も可能である。教育的作品は後世への影響も非常に大きいことが判明し、さらに考察を深めていくべきテーマとしてとらえるようになった。なお、このテーマに関しては、キーチが若者向けに執筆し、17世紀末に人気を博した教育的作品の論考をまとめ、2021年(査読を経たのちに)出版が見込まれている英米文化学会出版物に投稿した。今後研究対象とする作品の範囲を拡大していきたい。非国教徒作家による個別の作品は本課題の研究期間内におさまる分量をはるかに超えるものとなったので、継続して詳細な考察分析を行い、本課題の成果を発展させる形で、さらに時間をかけて非国教徒文学の全体像をとらえていきたいという展望を持つに至った。本研究ではプリントカルチャーという大きな枠組みの中で、出版統制、検閲、著者と出版者の関係などを含めて研究を進め、ピューリタニズムを背景とする非国教徒市民の識字率の高さと廉価印刷物の普及によって、当時英国で独特の文化が形成されていたという具体的事実の一端を解明することができた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 高野美千代	4. 巻 14
2. 論文標題 ベンジャミン・キーチによる『悪魔との闘い』の出版と読者	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 山梨国際研究	6. 最初と最後の頁 53, 60
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 高野美千代	4. 巻 13
2. 論文標題 ベンジャミン・キーチと非国教徒プリントカルチャー	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 山梨国際研究	6. 最初と最後の頁 37, 46
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Michiyo Takano	4. 巻 15
2. 論文標題 John Bunyan's The Pilgrim's Progress in Japan	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 山梨国際研究	6. 最初と最後の頁 37, 44
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

海外研究協力者を招聘して開催した国際研究集会での研究発表

2019年7月14日 「17世紀英国のプリントカルチャー」於甲府市藤村記念館
 講師：ジョージ・サウスコム（オックスフォード大学）演題：Protestantism and Print in 17C England、
 講師：高野美千代 演題：「非国教徒とプリントカルチャー」

2019年10月9日 「17世紀イングランドにおける清教徒と出版」於山梨県立大学
 講師：ニール・キーブル（スターリング大学）演題："Puritanism and Print in 17C England"、
 講師：高野美千代 演題："John Bunyan's The Pilgrim's Progress in Japan"

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	サウスコム ジョージ (Southcombe George)		
研究協力者	キーブル ニール (Keeble Neil)		